

苦難の女専設立

1



日本近代の農政家・教育者として知られた山崎延吉

「現在の農業教育は、知識偏重に陥り、労働を厭^{いと}い、実際の役に立たない教育をしている。僕は、こう思うから、農林学校ではこれを打破することに努めた。

教育は勤労主義でなくてはならない。教育は学校だけに閉じこめておくべきではなく社会に延長すべきものである。教育は環境をよくしていかねばならない。

この三カ条を教育信条として具体的な実践を図ったのだが、あなたがこの地に女子専門学校を創ろうと志されることは、安城にとって大いに歓迎すべきことです。

失礼ながら、あなたの経歴、考え方からして、あなたなら、立派な教育成果を挙げていただけるでしょう。実際、僕もあなたと似たような境遇に育ったから、大いに共感しているんですよ」

山崎延吉が来客に熱く語っていた。客はだいたった。

山崎は代々加賀藩に仕えた五百石取りの武家の家柄であったが、維新により家録を失って貧しさをかこつことに…。学歴は最終、東京帝国大学農芸化学科を卒業したが、生まれつき虚弱体質でまた物怖じする面もあったため集団生活になじめず、小学校では一時退学することにもなった。

そんな過ぎ来し方が、だいを目の前にした山崎にふと、よく似た境遇と言わせたらしい。山崎もかの『主婦の友』の特集記事には関心を持つて目にしていたと見える。

文部省にやつと事情を了解してもらうまでに一年以上を費やしていた。出願内諾を得て事を急がねばならない。だいは、白羽の矢を立てるとすぐさま山崎を訪ね、文部省の意向や自分の専門学校設立の志を伝えて、協力を依頼した。その日は大正十五（一九二六）年十月十二日であった。

山崎は自らを「我農生」と称し、『我農生興村行脚日記』と題して日常の記録を綴っていたが、このときのことをその日記にも克明に記していた…。

2

「…安城町の女子職業学校は、全国的の私立学校である。寺部氏は、女子専門学校にせんとして、僕に助力を求めて来られた。僕は同氏の献身的努力を知っており、学校の成績も認めているが、未だ学校を見たことはない。しかし寺部氏の誠意と努力とは分っているので、僕は微力を輸すことを約した。安城に誇り得るものの一つは女子職業学校であるが、やがて県下に必要である専門学校に



昭和2年頃の校舎全景（現小堤町）

なるのは、誠に結構であると僕は感謝せざるを得なかった。」

山崎は、同校の寺部三蔵理事長が修養団に傾倒し、機関誌『清明心』の財政的な窮乏を援けるため定期購読を生徒に奨めるなど、財政的にも支援の手を伸べていることを、愛弟子の稲垣稔を通じて知っていた。そんなよしみも感じて、山崎はだいの意向を真摯に受け入れ、力を貸すことを快諾したのであった。

山崎はさっそく動く。町長の岡田菊次郎に会って、安城に女子専門学校を設置することに町も後押しするよう促して、町の積極的な賛助の意を確かめると、そのことをだいに知らせて、背中を押したのであった。

山崎の協力を得ただいは、専門学校設置の申請準備を進める中、翌昭和二（一九二七）年四月、修業年限三年の「専門部」（家政科）を発足させた。これを基礎として、将来、専門学校に昇格させるための準備に取りかかったのである。

専門学校を設立するにあたっては、校地・校舎施設の整備、充実した教員スタッフ構成などが求められたが、まず財団法人を組織するために現金預金五万円が基金として必要だった。



安城女子職業学校の校章をあしらった「校友会誌」表紙（昭和3年11月刊）

しかし、昭和二年には寄宿舎の整備、三年三月には、第三期工事として四教室分の平家建て校舎の新築など、〃尺取虫〃のように少しずつ施設の補充を続け、まさに〃連年にわたる工事続き〃とあって、手許には五万円どころか一万円の余裕もない。理事長の言う通り、財政上から考えても専門学校設置は無理な相談だった。

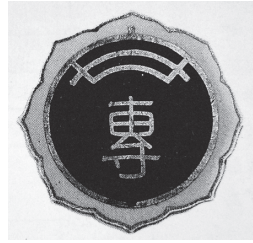
しかし、財政の余力を待って手をこまねいては時機を失する。だいは、あらゆる手を尽くして金策に駆けずり回った。

3

昭和三（一九二八）年六月には、幼児教育の延長のようなかたちで農繁期託児所を設置した。農事教育にもかかわる専門学校教育の前触的な取り組みといった意味合いもあった。だが、その収益を少しでも専門学校の設置資金に充当していこうというねらいもあった。

こうして八月には専門学校設立のための準備がほぼ整い、翌四年春の開校を目指して申請した。

「これでいよいよ愛知県では〃二番目の女子専門学校〃として誕生することができる……」



昭和3年に制定された「安城女子専門学校」の校章

愛知県下での女子専門学校は、名古屋に金城女子専門学校がただ一校存在するに過ぎなかった。

認可条件をすべて満たし、待望の認可を待つのみ。十二月の時点では、翌年四月には専門学校の設立認可がおりる見通しがかなりはつきりして、学生募集の準備、〃安城女子専門学校〃の校章制作、そして学則を頒布する準備も着々と進められた。

校章は、〃安城女子専門学校〃の〃安〃と〃専〃をあしらったもの。そのデザインは安城女子職業学校のそれにならったもので、これまで培った安城地域での教育の誇りを表徴していた。

だが、認可決定も差し迫ってきた四年三月七日、文部省から急電が入った。

「女子専門学校出願の件で相談したいから、来庁されたい」

―何事だろう。

全く事情の解せないまま、取るものも取りあえず上京した。すると、意外なことを告げられた。

「今回、愛知県から女専設置申請が二校、しかも同種の出願がされている。一校はその母体である高等女学校の生徒数も多いし、法人基本金も十五万円を用意しており、その上、名古屋にあるので許可のおりる可能性が高い。そこで安城の方も、基本金を増して、少なくとも十万円程度にしないと、書類却下の恐れがある。よって至急に法人組織を変更するように…」

だいは、自分の顔が青ざめるのを感じた。



安城裁縫女学校生徒の石原よね(大正4年卒業)の作品

「このうえ更に?…」

法人基本金の五万円はまさに血のにじむような努力で準備した。それが、更に五万円の上乗せ要求…。これ以上どうなろう、との絶望感が走った。

「これはもう出願をあきらめるより仕方がない」

だから事態を知らされた三蔵はすっかり悲観した。

—もう手の打ちようがない。

さすがのだいも、万策尽きた思いで途方に暮れた。

だが、やはり、だいは「打たれ強い女性」だった。挫折、諦めといった感情になだれ込むようなことはなかった。

—ここでくじけては、これまでの努力が水の泡になる。

なんとしても「希望の糸」を紡ぎたかった。

自分には、母子二人で寄り添うしかない逆境の中、小さい時から、母とともに幾多の苦難に堪え抜いてきた「意地」がある。母はその「意地」を育んでくれた…。

その母は大正八（一九一九）年十二月、わが子の営む学校が甲種中等程度実業学校と本格的な学校になったのを見届けながら他界していた。だいは、その亡き母の面影をまぶたに浮かべながら、この絶体絶命の危機をどう切り抜けたらいいか、瞑想した。

経済的な危機は若い時にもあった。上京し勉学を始めた矢先、学資借用の当てがはずれてしまった。国元の母からは毎月米と味噌と梅干が送られてくるが、途絶した学資を自らまかなうためにさまざまな「アルバイト」に携わることになった。それらが走馬灯のように想起された。

肉体労働もいとわず、実入りがよいというので、男装までして男勝りに人力車の車夫もした。だが、その男装をお客に見抜かれたことも…。

それまで追憶の糸をたぐっただいは、はっと気づいた。

—そうだ。武部男爵にお願いしてみよう…。

それは、一縷の望みにすがろうとする直感的なひらめきだった。

5

人力車の車夫をするある夜、一人の紳士を本郷まで乗せた。着いた先は大きな屋敷だった。門番に警官がいた。家令たちが居並んで出迎えた。

「お前は、女か」



安城女子職業学校での礼儀作法の指導
(昭和5年頃)

車を降りる時、紳士はおぼろげに感じていた不審を確かめるようにだいに訊いた。それを警官が聞きとがめた。だいは身元調べなど色々尋問されるはめになった。だが、神はここに「偶然」の介在を差配した。その警官はかつて桜井村の駐在所にいたことがあり、古着商を営むだいの家にも定期的に調査にきて、母やつとは顔見知りだった。聞きただすうち、警官はだいの身元を知って、その奇遇に驚いた。

「あの時の子どもさんがあんたか」

警官は、子どもの頃のだいも見覚えていたのだった。

「この広い東京でも女で車夫をする者はない。車夫だけはやめるように……」

警官はそんな旧縁から親身になってだいの苦学生生活を案じてくれ、その計らいで、武部邸で住み込みのお手伝いさんとして勤めることになった。武部邸では、奥向きの洗濯ものや仕立物の下仕事を受けて学費を補うことができた。こうしたことに恩を感じただいは、学業成り安城へ帰って学校を経営するようになってからも、夏の講習などで上京した折には、よく武部家にご機嫌伺いに赴いていた。

今、そのよしみにすがって武部家に借財を願ってみようと思

ついたのだった。

―厚かましいとは思うが、背に腹は代えられない。

思い詰めただいはただちに上京、武部邸を訪ねた。

あいにく主は不在だった。

「久しぶりでですね。学校のほうはうまくいっていますか」

夫人が応対して、いつものご機嫌伺いでもなさそうな様子を察して、一通り用件を聞いてくれた。

「間もなく帰られるから、用向きを詳しく申し上げるとよろしいでしょう」

夫人は話を聞き取ると、そう言うてだいを待たせた。

6

程なく主が帰ってきた。家人となにか話し合っているようだったが、しばらくしてだいが待つ応接室に入ってきた。挨拶もそこそこに、だいの正面に対座した。すると、やおらテーブル上に一枚の紙片を差し置いた。見ると、小切手。そこに書かれた金額は五万円と読めた。

主が口を切った。

「これは、財団法人安城女子専門学校に寄付する。さっそく願書に添えて当局に提出するように…」

「えっ！…」



学業終えて一時勤めた石部実業補習女学校の教職員（前列右から2人目が寺部だい）

いきなりの想像もしない言葉だった。だいは、言葉に詰まった。

夫人から大方の事情を聞いて事を察したと見える。だいが何の釈明をする必要もなかった。

だいは、膝に置いていた手をぐつと拳に強く握り締めた。顔が紅潮するのが分かった。

だいは男爵を凝視した。

―ありがたいことに、男爵は私の人柄を認めておられるのであろう。しかし、いかに人柄・実力を認めたとはいえ、五万円もの大金を事をなげに提供されるとは…。

あらためて男爵の人としての大きさを感じた。

*

感動を胸いっぱい、安城に立ち帰っただいは、このことをさっそく山崎に報告した。

先に「基本金不足による書類却下の恐れあり」という情勢を報告に行ったとき、

「そんな馬鹿な！」

報告を聞いた山崎のひげが興奮に小刻みに震えるのを、だいは見た。その震えから山崎の義憤を感じ取ったのだったが、この武部の寄付の報告には、山崎は目を丸くした。だいにはそう見えた。「さすが東京には偉い人がいるものだなあ。しかるに同じ東京に

おりながら、文部省は一体何をしているのか。情けない。早く目を覚まして頭の切り換えをすべきだ。そして一刻も早く安城女子専門学校を認めるべきだ。よし、さっそく文部省に掛け合おう」
声を高めたことが山崎の受けた感動の大きさを表していた。

7

認可再申請が急がれた。しかし、時遅し。この年の認可には間に合わないことになった。山崎は『興村行脚日記』に書く。

「…女子専門学校を建て農村を背景とし、農村的の人物を造らむは、僕等の念願である。幸に寺部氏は独力一切の資格を具備して認可申請をしたが、文部省は容易に許可せぬ。寺部氏は宛ら物狂の態であり、後援者の岡田町長また座視するに忍びずとあって、共に上京して僕に助力を求められた。斯る事は頼まれてやるべき事ではない。僕は上京後安藤参与官にはよく情を尽しておる。故に文部省の意向を聞くべく、寺部、岡田両氏を帯同して世間並の運動に出かけた」

三月二十三日、山崎は、だいと岡田を伴なって、文部省に安藤参与官を訪ねた。

そして、認可延期が確定的であることを覚ると、ある決断をした。

「文部省の意向を知るに至って聊か決する所あり。寺部、岡田の両氏に旨を諭して別れたが、場合によりては、僕が校長を引き受け、内容の充実に一臂を添へる事になるかも知れぬのである」

昭和四（一九二九）年四月からの女子専門学校設置は、結局、名古屋の椋山女学園に認可がおりて、安城女子職業学校からの申請は見送られることになった。安城での女子専門学校設置は仕切り直しとなった。



安城女子職業学校に初めてテニスコートが完成。
全校生徒が作業に携わった（昭和3年）

文部省の意向を確かめた山崎は、この時、期するところがあって、安城女子専門学校の校長就任を決意した。山崎は、安城女子専門学校の認可されない理由が、単に財団法人の基本金の額の乏しさにあるのではなく、その教員陣の充実の不備にあることを知って、一肌脱ぐ気になった。山崎は日本の代表的な農業地帯である安城で、農事教育にもかかわる専門学校をむげに否認されることに義憤を感じたのだった。

山崎はこの時多忙の身だった。前年の昭和三（一九二八）年二月、普通選挙法に基づいて最初の総選挙――「第一回普通選挙」が行われるにあたって、周囲からの強い後押しもあって出馬して当選し、衆議院議員になっていた。その超多忙な中の決断だった。



昭和3年11月10日、天皇即位のご大典の当日、
安城女子職業学校で行われた祝賀式

「安城に女子専門学校を設立すべく年来の努力未だ酬いられず、寺部氏の焦慮は気の毒である。農村を背景の女子専門学校はあってよい、そこに寺部氏が着目して万難を排しての努力は見るに忍びず、僕は校長を引き受けてその成立を早からしめたいと尽力をしておるのである。」

山崎は、日記にこうしたためながら、積極的に安城女子職業学校との接触を深め、認可のための布石を敷いていった。

「あなたがやられるならよからう」

文部省当局からそんな言質^{げんち}もとっていた。

*

昭和四（一九二九）年の十一月、高松宮殿下が二日にわたって愛知県の農村視察に来訪された。一日目は安城の農事視察。案内役となった山崎は、農村女性の自立に尽くす安城女子職業学校の存在を紹介し、農事に関する高等教育として安城女子専門学校設立の経緯についても説明し、その必要性を訴えた。

専門学校教員については、これまで申請された安城女子職業学校

の主要教員に、山崎の人脈を生かした教員スタッフを選び加えて教員構成に厚みを増した。

倫理 農学士 山崎延吉

哲学 文学博士 椎尾辨匡

農芸・園芸 農学士 内藤乾藏

農業経済 農学士 渡辺庸一郎

法制・経済 法学士 井上時次郎

国文 文学士 今枝和夫

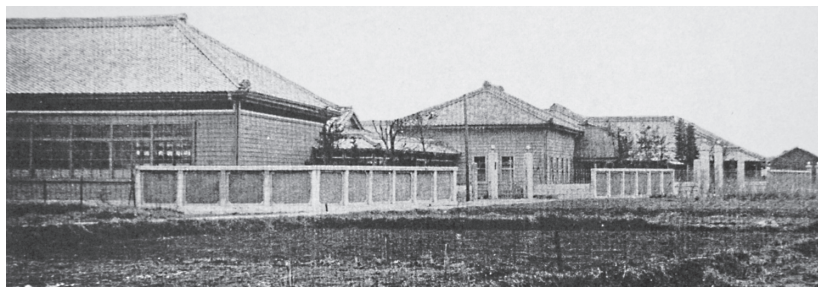
田中隆三文部大臣あてに開申したこれらの顔ぶれは錚々たるものだった。

なかでも椎尾^{しゅうお}は、仏教運動として共生運動を推進する日本の仏教学者であり、当時は大正大学教授、また山崎と同時に愛知一区から出馬して当選した衆議院議員の同志でもあった。

内藤は札幌農学校の出身で元安城農林学校教員であり、山崎の手の内の人。渡辺は現職の東京帝国大学助教授で山崎の女婿であった。いずれも山崎の広い人脈によってそろえた強力なラインナップだった。

9

校舎・設備もまた、〳〵尺取虫〳〵計画ながらより申請基準を満たすことに努めた。



昭和5年頃の正門（右）と通用門

安城高等小学校の旧校舎を購入・移転、旧校地の残る校舎三棟も移転して、一棟は二階建に改造して正門に接し、階下を事務室に、階上を理科と裁縫などの標本室に、他の二棟は普通教室としてその奥に並設。正門周りを整備して、〃高等教育機関〃としての体裁を整えた。

こうして着々専門学校設置の準備を進めた結果、昭和五（一九三〇）年四月、財団法人安城女子専門学校が認可され、念願の専門学校を設立できることになった。

安城女子専門学校は、全国の家政系女子専門学校の十一番目、愛知県内では金城・相山につぐ三番目の女子専門学校としてスタートしたのである。

実際に発足した当初のあゆみは決して安易なものではなかった。

安城女子専門学校が認可されれば、裁縫科中等教員の免許状は無試験で下付されるものと思っていたところ、文部省が行う国家試験に合格するという条件がつけられていた。この検定試験はかなり厳しいもので、学生は安城女子職業学校と同様、試験に合格して教員資格を取るために日夜懸命に勉強することになった。

この〃専門学校設立〃は、中等教員養成の道が開かれたという実利

とともに、学園自体にとって、当時の女子教育の最高の「高み」にのぼったということへの責任感と自負をもたらすことになった。

だが、これがまた、戦後に始まる新展開の時代において総合学園を構築していく礎になることは、この時点ではだいても山崎も見極めるべくもなかった。戦前の今、辛苦して専門学校を設置したことは、戦後の新学制発足にもなって新しく設けられた「短期大学」の設置の基盤ともなり、戦後のいち早い総合学園化につながるのである。